

# 世界一週時計の旅

山 本 一 清

## ま る い 地 球

の上に住んでゐる吾々は毎日東から西へ巡る太陽を迎えるだから、東にゐる人は早く日を迎え、西にゐる人は其れが遅い。だから、南北に離れてゐる二人ならば、なにも違つた時刻を持つ必要は無いのだけれど、東西の方へは、この僅か距たつた二人の間にも厳密に言へば、時刻の違ひ（従つて、用ゐる時計の針の違ひ）はあるわけである。しかし、此れを只むやみに嚴格に考へてばかりゐては、日常生活に不便が多いので、吾人は、こゝに標準時なるものを約束し、其れによつて人間社會の一部分づつが同一の時刻を用ふこととする。

一定の地に住んでゐるものに取つて、此の標準時制は便利である。しかし世界を跨にかけて旅しまはる者に取つては、（止むを得ないとは言へ）各地々々の標準時なるものが可なり複雑なものだこの経験を與へる。——先づ、自分が1922年の秋から1925年の春まで三十ヶ月を費した世界一週旅行の途中、行く先き々々で如何に時計に悩まされたかを書いて見やう。

1922年9月14日、自分は英子と共に

## 横濱を出帆

した、横濱での時刻は、言ふまでも無く日本の中央標準時で、播州明石を南北に貫く東經135°の子午線に據つたものであつた。横濱は東經139°39′であるから、厳密に言へば、日の出沒が明石よりは18分37秒も早いわけ。従つて、9月14日午後3時に船が港を出た時は、本統は横濱時刻の3時18分37秒であつた筈である。しかし此れ程の違ひは僅かなものであるし、又中央標準時として日本人一般が用ゐてゐるのであるから、差し迫つて不便でも無く、不都合でも無い。

ところが、船が横濱を出て

## 太平洋に乗り出し

て見るに、いよいよ、中央標準時の圏外になつて、其れから後は、船の中に居る者一同、船長の告示通りの標準時を用ゐることになつた。船は東へ走るのだから、毎日少しづつ太陽の運行を「出迎え」に行くわけ。従つて一定の地點に住む人々よりも、日出が早くやつて來、又、正午も早く、日沒も早くなる。故に一日の長さが決して二十四時間では無くなる。——尤も船中の一日が二十四時間よりも如何程少ないかは、船の速度に密接な關係がある。自分等の船は横濱出帆後、毎時間平均12乃至13哩（マイル）走つた。故に一晝夜に三百哩ほぎ東へ

行く割合となる。船の北緯は平均  $45^{\circ}$  ぐらいのところであつたから、此の邊での300哩は時刻にして28分ほごとなる。尤も、日によつて針路も多少違ひ、又天氣模様——殊に風向きで船の速度も一定では無いから、簡単な考へは許されないが、とにかく、船長は、「此の航海中は船の時計を毎日30分づつ早めて行く——即ち、一日を23時30分とする。そして時計の針は毎日夜半に改める」と告示した。

ところが、こゝに一生の一大事が起つて來た。それは年齢の中に入らない妙な一日を與へられるこゝになつたからである。それは經度(東西共に)  $180^{\circ}$  即ちグリニチからは正反對の一線を船が越えた事に關連する。9月23日の夕、船長は「明日は最う一度9月23日にします」との告示を出された。實は、經度  $180^{\circ}$  を本統に越えたのは22日であつたのだが、とにかく、こゝに同じ名の日を二度續け様に與へられたのである。此れも世界旅行の一興には違ひない。

### 北米の西岸

にたどり着いて、船がバンクーバー港に入つたのは9月30日であつた。其の前日船の位置は北米一帯の「太平洋岸標準時」圏内に入つた。(此の標準時はグリニチ時刻より八時間遅れた時刻で、從つて日本の中央標準時より17時間遅れたものである。)だからバンクーバーに着いた日も其のまゝの時間を船では使つてゐた。

ところが30日の午後投錨と同時に吾々は上陸して市内を散歩に出かけたまでは無難であつたが、ふと或る店の時計を見るに、吾々の時刻は一時間違つてゐる。之れも、始めは「其の店の時計が間違つてゐるのだ」と軽く考へてゐたが他の家も、其の他の家も、しまひに郵便局も、時計の針が皆同様に一時間進んでゐるのを見て、何だか氣が變になつて來た。自分の時計が誤りかと思つて英子やH君の時計とも比べ合はして見たが、三人の者は皆一致してゐる。何だか變だが、とにかく「午後8時までには船へ歸つて來て下さい。まもなく出帆するのですから」と、上陸する時、船員たちから注意されたのを思ひ出し、大事を取つて、店舗の時計の八時にならない前に愴惶として船へ歸つた。歸つて見れば、船の時計はやはり未だ七時前である。「どうしたのでせう?」と、遠慮しつつ船長に聞いて見たら、「いや、此の市内では今

### 夏期時刻 (サマータイム)

を使つてゐるのです。しかし其れも今日限りで、明日から十月ですから夏期時刻は止められ、普通の時刻に變るのです」この返事。なるほご之れで事情が判明した——と同時に、自分は、今まで人の話にばかり聞いてゐた「サマータイム」にきわどい所で打つつかたのであつた。

翌十月一日正午前シアトル着。見るに此の市内では、何の不思議もなく、吾々の船と同じ「太平洋岸標準時」を使つてゐる。——しかし其れは丁度此の日の朝からの事で、實は昨日まで、此のシアトルも夏期時間であつたのだ。

十月九日朝シアトル出發、セントポール鐵道でシカゴに向ふ。シカゴまで車中が丸三日と二時間、其の間に二度時計が變つて、何れも一時間づつ針を進めた。米國は東西にも大きい國で、國全體にわたり

#### 四種類の標準時

を用ゐてゐる。最も西の部分が前記の「太平洋岸標準時」、次が其れより一時間早い「山岳部標準時」、次が又一時間早い「中央標準時」。最も東の部が「太西洋岸標準時」で即ち又一時間早く、つまり英國のグリニチ時より五時間遅れた時刻になつてゐる。十月十一日、自分等は車中で「中央標準時」圏内に入り、翌十二日其の同じ圏内のシカゴ市に着。

十月十八日からは、井リヤムスベアのヤーキース天文臺に滞在することゝなつた。しかし此の邊は一帶にやはり「中央標準時」の圏内であつて、二三時間の汽車の往後に時計の針を變へなければならぬ必要は無い。尤も1923年四月末から、市會の決議により、シカゴ市だけは又夏期時刻を用ゐることゝなつたけれど、其れは只シカゴ市だけの事で、吾々のベール村は之れを使はなかつた——夏期時刻も良い點が無いでは無い。しかし理屈は姑く置き、旅行者に取つて、市内では「市内時刻」(即ち夏期時刻)、停車場では「停車場時刻」(即ち夏期時刻で無い普通の時刻)を使はなければならぬのは面倒であつた経験を自分は此の頃度々持つた。

1923年六月末から自分等はベール村を去り、シカゴを経て、再び西の海岸へ行つた。サンフランシスコに着くまでの三日間の汽車の旅の中では、以前にシャトルから東行したのと同反對に、途中で二度時計の針を遅らせて、即ち一日二十五時間の日を二日持つた。それから、サンフランシスコやリク天文臺に其れ々々二週間を費して後、南カリフォルニアのパサデナ市に十月末まで滞在、毎日、井ルソン山天文臺に出入することゝなつた。此の滞在期中、所々に小旅行を試み、又、カタリナ島へは日食觀測のため一週間を泊つたこともあつた。しかし、すべて此の邊は皆「太平洋岸標準時」の領分内である。

十月末、自分等はパサデナを立つて、サンタフェ線により、又、東部に向つた。途中、シカゴやベール村に寄り、又、シカゴ以東ではデトロイト、ナイアガラ、オーバーン、オルバニー、サウス・ハドレイ村などに立ち寄つたが、結局十一月十二日ボストン市に着くまでに、

#### 前後三回時計の針を早めて

十一月二日ナイアガラに着くまでのカナダ・オンタリオ州横断中に、既に「太平洋岸標準時」の圏内に入った。

ボストンの近郊ケンブリッジ市には1923年十一月中旬から翌1924年八月末まで滞在した。滞在中であるが故に、日常の生活には「時刻」の混亂は殆んど無かつたが、只一つの事件が、やはり「夏期時刻」に関連して起つた。それは1924年四月二十七日であつた。此の日、自分等は招かれて近郊のセーレムに行く筈で、何心なくボストン北停車場に行つて見れば、恰かも此の日「夏期時刻」が開始されるので、地方列車の時間表は皆變更せられ、従つて、自分等は豫定の列車には乗れず、止むなく停車場に二時間以上の時間を空費したところ、尙、先方の招待主人側を其れだけ永く待たせたのであつた。

1924年九月八日、自分等はニューヨークを出帆して歐洲へ向つた。船は平均毎時16哩を出す新船であつたが、それでも歐洲側のグリニチ時刻圏に入るには八日を費した。従つて、船中では毎日40分づつ時計を早めた。

1924年九月十七日、自分等はフランスのアーブル港に入つた。其の後数日間のバリ滞り、それからオルレアン、ボルドーを経て十月末スペインへ入る頃までは、ずつと「グリニチ時刻」であつた——と言ふべき筈であるが、實は英、白佛、西等の國々を通じて行はれてゐる「夏期時刻」であつた。しかし本統の自分の心持を白狀すれば、歐洲に足を踏み入れてからは、下に記す出來事が不意に起るまでは、「夏期時刻」を現に使つてゐるまいふ事に全く氣が付かなかつた。と言ふわけは、米國での事情と違つて、歐洲の方では、市内も汽車も、總ての時計が皆、悉く同一の時刻制を示してゐたから。——「やるなら此れ程徹底しなければいけない」を自分も思つた。

スペインの首都マドリッドでの國際會合に連なる二週間は眞に楽しいプログラムで連続であつた。殊に其の中の頂點は十月四日の夜に皇宮内で催された王様たちからの御招待であつた。時刻は午後十時だとの御沙汰であつたので、「可なり遅い時刻だナ」を誰も皆思つたけれど、萬事が此の調子にのん氣に出來てゐるスペインの事なのだからとも思ひ返した。とにかく、會議に來てゐる十數ヶ國の代員たちは綺羅を裝ふて午後十時に宮中に參殿した。皆は十時までに揃つて王の出御を待った。しかるに十時半になつても、殆んど十一時になつても王の出御は無かつた。——するに、列してゐる代員たちの誰からとも無く傳はつて來る私語があつた。日はく

### 「賢明なる王様は明朝一同に一

### 時間の朝ねを御許し下さる！」

まいふのであつた。なるほど、考へて見ると、此の十月四日は歐洲一般に「夏期時刻」の最終の日なのであつた。明朝から總べての時刻は「夏期」式でなく普通

のものに變はる。従つて、例へば明朝六時になつても、それが普通時刻では五時なのだ。「王様が一時間の朝ねを御許し下さる」理由は全く之れであつた。實際、翌十月五日は一同がエスコリアル古跡へ案内せられる筈で、汽車は八時五十分發するさいふ前ぶれであつたけれど、それは「普通」の時刻である故に前日までの習慣上から見れば決して早い時刻では無かつたのである。

1924年十月から十一月まで、自分等は佛、伊、スミス、獨、白の國々を旅した。其の中で、伊、スミス、獨の三國は「中歐標準時」としてグリニチ時よりも一時間だけ早い時刻を使つてゐるため、「グリニチ時」を使つてゐる國との間の出入には時刻の變動が可なり面倒であつた。殊に自分の此の旅行中には、ドイツ旅行中の二ケ日だけを新フランス領ストラスブール市に費したことがあつたし、尙又、頗る面倒であつたことは、ドイツのフランクフルトからケルンまで、ライン河畔の臨時占領地帯には公式に「佛國時」(即ちグリニチ時刻)が强行せられ、しかも被占領者の一般市民たちは「ドイツ時」即ち中歐時を用ゐてゐたことであつた。

十一月中旬から自分は暫くパリを立つて英國に旅した、しかし、英と佛とは今全く同じ時刻を用ゐてゐるため、「時」に關しては何の困難も起らなかつた。次いで、同年十二月に自分はパリを立つて、白蘭兩國を通過し、中央ドイツまで足をのばした。此の旅中、白蘭はフランスと同じ時刻を使つてゐるから、英國同様、時刻制は極めて平易であつたが、オランダは以前から、よほぎ、頑固な取り決めを守つてゐる。此の國は一般に「アムステルダム時刻」と稱して、グリニチ時よりは

### 19分32.1秒早い時刻

を使つてゐる。尤も、汽車の發着などには秒の桁はさうでも良いのだから、只およそ20分だけの違ひだを知つて置けば良いわけなのだが、とにかく、世界一般の大勢に従はないで、グリニチ時と半端な時差を持つやうな時刻を用ゐてゐるのは自己のためにも他國のためにも不便此の上も無い。殊に此の歐洲の中部にある國なのだから。——此のオランダを立つて、ドイツに入つた時にも、まだ時計は

$$60分 - 19分32.1秒 = 40分27.9秒$$

だけ進めて、ドイツ時刻を求めた。

自分は1925年一月十六日佛國パリを立つて、一旦中央イタリーに入り、一月二十七日ナポリ港から鹿島丸で歸朝の途についた。(佛伊の國境で時刻を一時間だけ進めたのは勿論である。)鹿島丸の船中三十八ケ日、絶えず或る速度を以つて東へ東へ航海し續けたのであるから、所々の港に停船中の一日づつを除いては、毎日一定の時間だけ時計の針を早めることが船長の告示によつて行は

れた。此の毎日毎日は、船の速度も一定でなく、又、船の東西方向の變位も一定でないで、或る時は時計を10分進め、又、或る時は5分、或は30分。全くまち々々であつたのは止むを得ない。此うしてナボリの「中歐標準時」から日本の「中央標準時」までの八時間の違ひを、毎日少しづつ直して行つたことになつてゐる。

こにかく、横濱を出て神戸に歸る迄、毎日の仕事としては少しづつ時計の針を直し、結局、日本の「中央標準時」から再び日本の「中央標準時」に歸つたのであるから、日々の時計の修正は、積り積つて、總計24時間になつた筈である——だから言つて、自分等は此うした旅行中、毎日少しづつ時間をけづり取られて、つまり24時間即ち一日を損したやうにも思はれないことは無い。しかし其の代り、太平洋のまん中に於いて、前記した通り、1922年九月二十三日といふ日を二度重ねたことになつてゐるのであるから、やはり、自分としては、別に、時間の損をしたわけでも、徳をしたわけでも無い。結局プラスマイナスマでゼロ時間だけ壽命を延ばし得たに過ぎない。

### 世界各地の標準時一覽表

(日本の中央標準時で正午の時、世界の各地での時刻)

| 時 刻        | 標準時の名稱                 | 各 地 別                                    |
|------------|------------------------|------------------------------------------|
| 午 後 2時30分  | —                      | ニウジーランド(南洋)                              |
| 同 1時 0分    | 東 濠 州 時                | { 平クトリア、ニウ・サウス・エールズ、<br>クキンスランド、タスマニア    |
| 同 0時30分    | —                      | 南濠州                                      |
| 正 午        | 日本中央標準時                | 日本中央部、朝鮮                                 |
| 午 前 11時 0分 | { 日本西部標準時<br>支 那 東 岸 時 | 臺灣、支那東部、西濠洲                              |
| 同 10時 0分   | 支 那 南 岸 時              | 支那南部、フランス領インド支那                          |
| 同 8時30分    | —                      | 東部インド                                    |
| 同 5時30分    | —                      | アフリカ東岸                                   |
| 同 5時 0分    | 東 歐 標 準 時              | ロシア、バルカン地方、エヂプト、南アフリカ                    |
| 同 4時 0分    | 中 歐 標 準 時              | { 獨、伊、スビス、スカンディナヴィア、奥、丁、<br>ホンガリー、ポーランド、 |
| 同 3時19.5分  | アムステルダム時               | オランダ                                     |
| 同 3時 0分    | グリニチ標準時                | 英、佛、西、白、葡、アルゼリア、モロコ                      |
| 同 0時 0分    | —                      | ブラジル東部                                   |
| 前日午後11時 0分 | 太西洋岸標準時                | カナダ東岸、アルゼンチン、中央ブラジル                      |
| 同 同 10時 0分 | 東 部 標 準 時              | { カナダと米國との東部、ブラジル西部、ペル、<br>パナマ           |
| 同 同 9時 0分  | 中 央 標 準 時              | カナダと米國との中央部                              |
| 同 同 8時 0分  | 山 岳 部 標 準 時            | カナダと米國との山岳部                              |
| 同 同 7時 0分  | 太平洋岸標準時                | カナダと米國との西部                               |
| 同 同 6時 0分  | —                      | アラスカ                                     |
| 同 同 4時30分  | —                      | ハワイ諸島                                    |